

キューバ革命の背景

藤田 宏 郎

- 一 外国支配
 - 二 経済の停滞
 - 三 政権の欠陥
- はしがき
むすび

は し が き

一九五九年一月一日、キューバの独裁者フルヘンシオ・バチスタ (Fulgencio Batista) はドミニカに亡命し、フィデル・カストロ (Fidel Castro) によって指導されたキューバ革命がここに勝利をおさめた。カストロは、最初、一九五三年七月二十六日、バチスタ独裁政権に反対し、モンカダ兵営襲撃に立ちあがったが、その襲撃は失敗した。しかし、一九五六年一二月に再びバチスタ打倒に立ちあがり、以後二年余りのゲリラ闘争をへて、勝利をおさめたの

である。

このキューバ革命は、ラテン・アメリカで頻発する、権力構造の上層部内における単なる政権の交替劇（クーデター）ではない。これは、単なるクーデターといったものではなく、広範な、政治、経済、社会構造の根本的な変革をめざす、いわゆる「真の革命」⁽¹⁾である。このキューバ革命は、一九一〇年に始められたメキシコ革命、一九五二年のボリビア革命とともに、ラテン・アメリカにおける数少ない「真の革命」の一つであり、後進国革命、特にラテン・アメリカ諸国の革命に大きな衝撃をあたえたものである。従って、この革命は、ラテン・アメリカ史上画期的な事件をなすものといえよう。

本稿は、このキューバ革命を生起させた背景の諸要因を分析することを目的としている。また、他の大多数のラテン・アメリカ諸国ではなく、キューバになぜ「真の革命」が起きたのか、その理由をも併せて考察したい。

(1) G・I・ブランクステンは、単なる上層部内の政権交替に過ぎないクーデターと区別して、政治、社会構造の根本的な変革をともなう革命を「真の革命」(true revolution)と呼んでゐる(George I. Blanksten, "Fidel Castro and Latin America," in Morton A. Kaplan (ed.), *The Revolution in World Politics*, New York, John Wiley & Sons, Inc., 1962, p. 114)。本来「革命」と「クーデター」は区別されるべきものだが、実際には必ずしも区別がなされていない。

一 外 国 支 配

まず革命を生起させた背景の要因の第一のものとして、アメリカによるキューバ支配があげられる。アメリカは早くから、キューバに関心をもっていた。キューバは北米大陸よりわずか九〇マイルしか離れていないカリブ海上

の要衝を占めており、戦略上極めて重要な位置にあったが故に、アメリカは、安全保障上の考慮より、この島がまだスペインの植民地であった頃より関心をもっていた。それ故に、アメリカは、弱体であるスペインにこのキューバを保持させるとともに、スペインの弱体につけこんで、フランス、イギリス等のヨーロッパ列強が、キューバに干渉しようとするのを極力排除する政策をとった。さらに、一八四〇年代に入ると、アメリカは、この島をスペインより買⁽¹⁾取るか、あるいは征服しようという動きすら一部に見られた。

そして、アメリカは、一八六五年の南北戦争終結以後、急速に発展したアメリカ経済を背景に、従来の安全保障上の考慮に加えて、経済上の考慮より、この島に関心をもちはじめた。というのは、キューバは絶好の砂糖生産地であり、アメリカ資本のこの上ない有望な投資の場であり、また地理的に近接している将来の有望な貿易相手国であったからである。アメリカのキューバに対する商業上の関心は、早くよりすであつた。一八二三年、時の国務長官J・Q・アダムス(John Quincy Adams)は、「わが海岸よりほほ見ることのできる位置にあるキューバは、種々の点より考えて、わが国の政治的かつ商業的利益にとつて極めて重要な対象となつてきた⁽²⁾」と述べていた。だが、まだアメリカ経済は海外に進出するほど発達していなかつたので、当時のアメリカがキューバに対して抱いていた商業的関心はそれほど強⁽¹⁾いものではなかつたと思われる。

しかし、一八六五年の南北戦争終結以後、アメリカ経済は急速に発展し、海外への進出体勢ができあがるとともに、キューバに対するアメリカの経済的関心は次第に強いものとなつた。そして、アメリカは積極的に経済的進出を行ない、キューバとの密接な経済関係ができあがってゆくこととなる。一八八一年初めに、一アメリカの領事は

「キューバは、政治的にはまだスペインに依存しているが、通商上はアメリカに依存するようになってきた」と述べていたが、これは、この頃のアメリカとキューバとの増大してゆく通商関係についての事情をよく示している言葉である。一八八〇年代におけるアメリカのキューバ貿易は、アメリカの外国貿易全体の約四分の一に達したと推定されている。⁽⁴⁾

このような通商上のみに限らず、アメリカの対キューバ投資も急速に増加した。アメリカ商務省の報告は、その当時のアメリカの対キューバ投資状況を次のように伝えている。

「一八九六年、当時の米国國務長官リチャード・オルニイ (Richard Olney) は、米国の対キューバ投資額を約五千万ドルと推定した。右投資は、主として Atkins Havemayer Rionda 等の製糖工場、および Bethlehem Steel Corp. Pennsylvania Steel Co. 等所有の鉱山を対象としていた。この外、コーヒー、砂糖、ココア、煙草、および家畜等の中小企業にも投資され、また米国の船会社、金融業界は主要港に代理店を開設した」⁽⁵⁾

このように、アメリカは、一八九〇年代には、キューバに権益をもつようになっていた。一八九五年にいたり、キューバにスペインの圧制に対する大規模な革命が起こったことにより、この在キューバのアメリカ権益が直接脅威を受けることになるとともに、アメリカは次第にキューバ・スペイン間の紛争に巻き込まれることになった。最初、アメリカはこの騒乱を静めるべく仲介の労をとったが、両者共に硬化し、不成功に終わった。そして一八九八年にいたり、アメリカ軍艦メーン号がハバナ湾で爆沈させられ、多くのアメリカ人が犠牲になったことにより、アメリカはスペインとの戦争 (米西戦争) に突入することとなった。

アメリカは短期間で戦争に勝ち、スペインの支配より、キューバを解放したが、一九〇二年までキューバの軍事占領を行なった。その間に、アメリカは、キューバをアメリカの保護国関係におくべく、上院議員プラット (Orville H. Platt) をして修正案を提議せしめた。これが有名なプラット修正 (The Platt Amendment) と呼ばれるもので、その要領は次のとおりである。⁶⁾

(一) キューバ政府は、外国とその独立を危うくするような条約を締結したり、また植民のためや、軍事目的のための基地を外国にあたえてはならない。

(二) キューバ政府は、国力不相応の通常歳入では支払えないような債務契約を他国と結んではならない。

(三) キューバ政府は、キューバの独立の保全のために、また生命、財産、個人の自由の保護に適切な政府を維持するために、またパリ条約によってアメリカに課せられ、現にキューバ政府により担当せらるべき責務を遂行するために、アメリカが干渉権を行使できることを承認すること。

(四) 独立維持とキューバ国民の保護のために、またアメリカ自体の防衛のために、アメリカは、海軍基地に必要な土地をキューバより租借できる。

しかし、この修正案はアメリカの一方的な希望条件であるから、法律上有効なものとするには、これをキューバ憲法の一部として、採用せしめることが必要であった。そこで、アメリカはこの修正案をキューバ憲法会議に提出したところ、これはキューバの主権の制限であるとして強い反対にあい、特にアメリカに内政干渉権を認めている条項が問題となり、この修正案を憲法会議は最初は認めようとはしなかった。キューバ国民は、真の独立はアメリカ

カを含めすべての国からの独立であると抗議した。しかし、アメリカよりの強い圧力により、他にとるべき道がなく、一九〇一年六月、キューバ憲法会議はやむをえずこの修正案を承認し、キューバ憲法の附属書として可決した。かくして、キューバ国新憲法は、その附属書とともに一九〇二年五月に公布せられ、アメリカの軍事占領も終り、キューバは名目上の独立国となった。しかし、プラット修正により、キューバは、事実上アメリカの保護国関係におかれることになった。

以後、アメリカ経済のキューバへの進出はますます活発となり、キューバへの投資および貿易額も急速に増加した。一八九七年におけるアメリカのキューバへの輸出額は、約二千七〇〇万ドルであったが、一九一四年には約二億ドルになった。⁽⁷⁾ また、アメリカのキューバへの投資も、一八九六年には約五千万ドルであったが、一九一五年には約二億六千五〇〇万ドルに増加し、さらに一九二九年には、約九億一千九〇〇万ドルにまで達していた。⁽⁸⁾

このように、米西戦争以後、アメリカはキューバに極めて深い経済的利害関係をもつようになった結果、在キューバ權益を擁護することが、アメリカの対キューバ政策の基調となって定着することとなる。かくして、アメリカはキューバに騒乱が起こるたびに、在キューバ權益擁護のために、プラット修正に基づき、しばしばキューバに軍事干渉を行なった。しかし、F・D・ローズヴェルト政権による、ラテン・アメリカ諸国に対する不干渉主義を宣明した善隣政策の採用にともない、一九三四年、このプラット修正は廃棄せられた。以後、キューバに対するアメリカの軍事干渉は手控えられることとなり、キューバは一応政治的には独立国となった。しかし、経済的には依然として従属関係におかれ、事実上、同国の経済はアメリカによって牛耳られていた。一九五六年のアメリカ商務省

の報告は、「キューバにおいて最も重要な外国資本は米國資本である。米國資本は、電話、電気事業においては九〇パーセント以上、鉄道約五〇パーセント、粗糖生産約四〇パーセントを占め、米國銀行のキューバ支店が有する預金額は、全銀行預金額のほぼ四分の一を占めている」と述べている。⁽¹⁰⁾ 一九五七年におけるアメリカの対キューバ直接投資額は八億五千万ドルであり、その他アメリカの所有する証券類は二億一千九〇万ドルに達していた。⁽¹¹⁾

このように、ますます深い経済的利害関係をもつようになったアメリカは、一九三四年のプラット修正廃棄以後、軍事干渉を手控えたものの、キューバによりいっそうの強い関心をもち続けた。そして、在キューバのアメリカ権益を擁護する支配者ならば、たとえキューバ国民が反対する（例えばバチスタのような）独裁者であっても、アメリカは力でもって支持し続けたのである。

このようなアメリカの支配に対し、その名目上の独立達成以来、キューバの知識人、一部の政治指導者達は憤り、常に不満をもち続けてきた。⁽¹²⁾ 一九三四年にプラット修正が廃棄され、キューバは一応政治的には独立国となった後にも、キューバ国民は、心理的には依然アメリカによって支配されているとの感情をもち続けた。⁽¹³⁾ 従って、まず一九五九年のキューバ革命の背景にあった主たる要因の一つとして、このようなアメリカの支配を指摘できよう。

(1) 一八四八年、J・K・ポーク (James K. Polk) 大統領の時に、アメリカはスペインに対して、一億ドルでキューバを買い取ることを申し出ている。

(2) Robert F. Smith, *What Happened in Cuba: A Documentary History* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1963), Document 5, p. 27.

(3) Quoted in, J. Lloyd Mecham, *A Survey of United States — Latin American Relations* (Boston: Houghton Mifflin Com-

- pany, 1965), p. 293.
- (4) Lester D. Langley, *The Cuban Policy of the United States: A Brief History* (New York: John Wiley and Sons, Inc., 1968), p. 86.
- (5) アメリカ商務省編『外務省アメリカ局中南米課訳『キューバにおける外国投資』米商資料第一四七号、一七ページ。
- (6) Smith, Document 21, pp. 125-126.
- (7) Robert F. Smith, *The United States and Cuba: Business and Diplomacy, 1917-1960* (New Haven: College and University Press, 1960), p. 24.
- (8) Ibid.
- (9) 『キューバにおける外国投資』一九ページ。
- (10) 同前書、一九ページ。
- (11) Smith, *The U. S. and Cuba*, p. 167.
- (12) Carl Leiden and Karl M. Schmitt, *The Politics of Violence: Revolution in the Modern World* (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1968), pp. 186-187.
- (13) 事実、プラット修正廃棄以後も、アメリカは、キューバの独裁者を通じて、間接的にキューバ政治を支配したとも見るべきである。
- (14) Russell H. Fitzgibbon, "The Revolution Next Door: Cuba," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, March 1961, p. 114.

二 経済の停滞

革命前のキューバ経済の状態は、他のラテン・アメリカ諸国やアジア、アフリカの後進諸国と比較すれば、決して

<第 1 表>

年 度	キューバの砂糖輸出額 (単位100万ドル)	キューバの全輸出額 (単位100万ドル)
1902—6	52	89
1907—11	78	119
1912—16	169	214
1917—21	426	482
1922—26	317	367
1927—31	174	232
1932—36	86	111
1937—41	128	163
1942—46	279	371
1947—51	612	689
1952—56	508	623

(出所) Anuario Azucarero de Cuba, 1959.
D. Seers, p. 8.

て悪くはなかった。一人当り国民所得では、キューバは、ラテン・アメリカ諸国の中では常に最上位に属していた。しかし、一九二三年から一九五八年まで、キューバ経済はほとんど発展しなかった。このキューバ経済の停滞は、他のどのラテン・アメリカ諸国の停滞よりも深刻であり、長く続いていた。⁽¹⁾

キューバ経済の悩みは、砂糖に依存する単作経済にあった。A第1表Vに見られるごとく、砂糖はキューバの全輸出額の八〇%近くを常に占めていたのである。しかも、砂糖の生産量が、どれだけの労働者が仕事にありつけ、どれだけ長く働らせるかを決め、鉄道の輸送、港湾の活動、商店の売れ行き、映画館の入りを決めた。⁽²⁾ すなわち、

キューバ経済全体は、砂糖を中心に回転していたといえる。

このように、経済全体が砂糖に依存しているということは、キューバ経済に多くの問題をもたらした。例えば、特に世界市場価格の変動の激しい砂糖に依存する結果、キューバ経済は常に不安定な状態におかれたことである。砂糖の世界市場価格の変動が、直接キューバ経済に大きな影響を及ぼした。また、製糖業が操業季（一年のうち六カ月）の短い季節的な産業であり、休業季には多く

の失業者を出すことも問題であった。毎年一月に始まり六月に終るサフラ (safra) の時期、すなわち甘蔗取り入れの時期には、キューバの経済活動と雇用は最大となるが、その後文字通り「死の季節」(tiempo muerto) が訪れ、大部分の農場労働者と砂糖工場労働者は仕事がなくなり、キューバの経済活動と雇用は最低となった。さらに、砂糖に集中するあまり、他の農・産業は閑却され、その発展も阻害されることになった。

このように、全く砂糖に依存していることは、キューバ経済の最大の弱点であった。従ってキューバ経済の発展には、この単作経済を改めることが何よりも必要であった。一九五〇年に、世界銀行の使節団は、「経済に占める砂糖の有害な支配力を絶ち切らないならば、経済改革のすべての努力は著しく阻害されるであろう。……そして、すべてのキューバ国民は低賃金に苦しむことになるだろう」と報告していた。このような国外よりの指摘をまつまでもなく、キューバ国内においても単作経済のもつ危険性が認識され、その改革の必要が主張されてきた。しかし、キューバの歴代の政権は、この問題には積極的に取り組まず、またたまたまにその努力をするものがあっても不徹底に終り、常に失敗してきた。

第二次大戦後、キューバ経済の停滞が著しくなるとともに、一九五〇年頃までには、キューバにとって経済開発は急務となっていた。しかし相変わらず、一部特権階級と結びついた政府が無策であったことより、国民の間には不満が次第に強くなっていった。その不満の第一は、異常な失業率の高さと、失業救済制度がなかったことである。ヒューバーマンとスウィーギーは、革命前のキューバの失業状況について、次のように述べている。

「一九五三年国勢調査の雇用統計をくわしく分析すると、年間を通じてキューバ労働力の約七五％しか雇用されな

かった。ならしてみると、労働でき、労働を希望したキューバ人のうち四人に一人は仕事をみつつけることができなかつた割合になる。……この四人に一人の失業数は革命前のキューバでは常態だつた……

米国の歴史における最悪の不況中の最悪の年で、失業者は約二五%だつた。このことを思いだしてみれば、キューバのおどろくべき——そして悲劇的な——事実の意味を十分つかむことができる。失業についていえば、キューバにとっては、毎年が米国の最悪の不況中の最悪の年のようなものだつた。しかも、キューバには、失業保険とか失業救済の制度はなかつた。⁽⁵⁾

一部特権階級を除く多くのキューバ国民が不満をもつた第二の点は、その悪い社会状態であつた。一九五三年の国勢調査によると、キューバの都市人口率は五七%、農村人口率四三%であつたが、特に農村の社会状態は悪かつた。農村の七五%以上の住居は、家といつたものではなく、ボイオ (bohio) と呼ばれる小屋であり、屋根はふつう椰子の葉でふかれ、床はたいいていのばあい土であつた。そして、ほとんど水道も、電気も、便所もなく、衛生その他の施設も驚くほど欠けていた。一方、農村ほどではないが、都市にも似たような状況が見られた。都市の家賃は一般に高く、労働者の収入の半分を占めていた。また多数の都市下層階級はスラム街に住み、その住居にはいずれも数家族が住み込んでいた。典型的な例として、一部屋に二人以上も住んでいるのがあつた。農村におけると同様に、都市でも病氣と栄養失調は一般的な現象であつた。

以上のような異常に高い失業率および劣悪な社会状態は、キューバ国民には次第に我慢のならないものとなつていた。このような時に登場したバチスタ政権の経済復興政策に、国民は最後の期待をかけたが、ほとんど見るべき

ものがなく、相変わらず経済停滞を打破できなかったことより、国民は次第にカストロの革命運動を支持するようになった。保守的な実業界の中にも、カストロを支持するものが現われた。それは、カストロならばこの緊急の経済問題に真剣に取り組むだろうと彼らが信じたからであると思われる。⁽⁶⁾

以上述べてきたところより、革命の背景にあった第二の要因として、キューバの経済停滞が指摘できよう。

しかし、キューバ革命の背景としての経済的要因について、D・ジェームスのように、それを否定する見解がある。D・ジェームスは次のように主張する。革命前のキューバの経済状態は、他のラテン・アメリカ諸国に比べてそれほど悪くはなかった。もし悪い経済状態がキューバ革命を引き起こした背景の要因であると考えるならば、当然キューバより悪い経済状態にある他の多くのラテン・アメリカ諸国に、キューバと同様な社会革命が起きたはずであるが実際には起きていない。従って、キューバ革命の背景の経済的要因は考えられない、と主張する。⁽⁷⁾

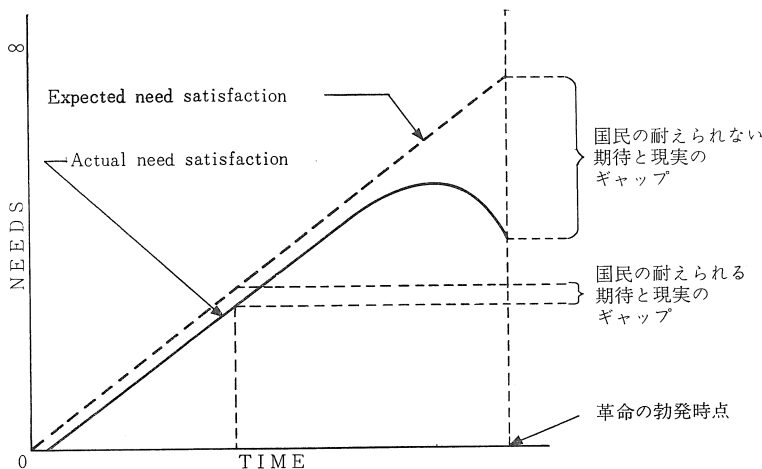
しかし、この見解は、「悪い経済状態が即革命を引き起こす」という誤った前提に基づいているところに重大な欠陥があるように思われる。悪い経済状態が、必ずしも革命を引き起こすのではない。C・プリントンは、イギリス、アメリカ、フランス、ロシアの四つの革命の研究より、一つの定律を見出し、「これらの社会は皆、革命以前においては経済的には全体として上向線を迎っていた社会であり、革命運動の端緒は、富裕なひとびとの中における不満にその端を発しているようである」と述べている。⁽⁸⁾ また、J・C・デーヴィスも、ロシア革命や一九五二年のエジプト革命をはじめとする種々の革命のケース・スタディより、革命は社会が貧困である場合に必ずしも起こるものではない、と述べている。そして、彼は、革命を生み出すのは、食物、自由、平等といったものが現実に充分あ

たえられているかどうかといったことよりも、むしろ人間の不満な心の状態である、と言っている。⁽⁹⁾

つまり、国民のおかれている現実の経済状態が良いか悪いかということとは革命には直接関係なく、重要なのは、そういう経済状態に対する国民の態度である。すなわち、革命を引き起こすのは、現実の悪い経済状態ではなく、その経済状態に対する国民の不満である。現実の経済状態が他国と比較して良くても、国民はその経済状態に不満をもつ場合もある。キューバの場合がそうであった。従って、キューバが、社会革命の起きていない他の大多数のラテン・アメリカ諸国よりも現実の経済状態が良いからとて、キューバ革命の背景の経済的要因は考えられないと主張するのは誤りであろう。

キューバは、他の大多数のラテン・アメリカ諸国よりも経済状態が良かったが、明らかに、キューバ国民は、他のラテンアメリカ諸国の国民よりも、より強い経済的不満をもっていた。その一つは、キューバが世界で最も富める国のアメリカに地理的に極めて接近していたために、アメリカの生活水準と比較する機会が多かったことに起因している。キューバは、一人当り国民所得ではアメリカの五分の一ないしは六分の一であった。地理的に接近していたために、キューバにはさまざまなチャンネルを経て、この現実の、ある場合には誇張された形でのアメリカの富める像が定着していた。⁽¹⁰⁾ それ故に、キューバ国民は、他のラテン・アメリカ諸国と比べて経済状態が良くても、アメリカとの比較において著しく悪い経済状態に強い不満をもっていたと思われる。キューバ国民が、より強い不満をもつにいたったもう一つの理由は、他のどのラテン・アメリカ諸国よりも長く続いた経済停滞と、後に述べるようにその経済停滞打破の期待が完全に裏切られたことである。

<第 I 図>



ここで、J・C・デーヴィスの革命理論をもう少し詳しく紹介しておこう。^(H)彼は、「革命は、長期間の實在の経済的、社会的発展の後、短期間の急激な後退が起きる場合に最も起こりやすい」と述べ、^ハ第I図Vのように図式化している。この図は、経済の順調な延びにつれて国民の期待が次第に上ってゆくが、しかし一時的に経済状態が急に悪くなった時に、国民の現実と期待のギャップが大きくなり、その時点で革命が起こるということを示している。いわゆる Actual Need Satisfaction が J・カーブを描く時に、革命が起こるといっているのである。そして、彼は、現実にこのような Jカーブのパターンは、ロシア革命、エジプト革命をはじめ他の多くの革命においても見い出せると述べている。

さてキューバ革命が、このデーヴィス理論に当てはまるかどうかを見てみよう。デーヴィスのいう Actual Need Satisfaction を具体的な数値でもって表わすには、何をとりかが問題であるが、その国の生活水準を示す年間の一人当たり国民総生産をとるのが最も良いと思われる。キューバの年間の一人当たり国民総生産は^ハ第2表Vのと

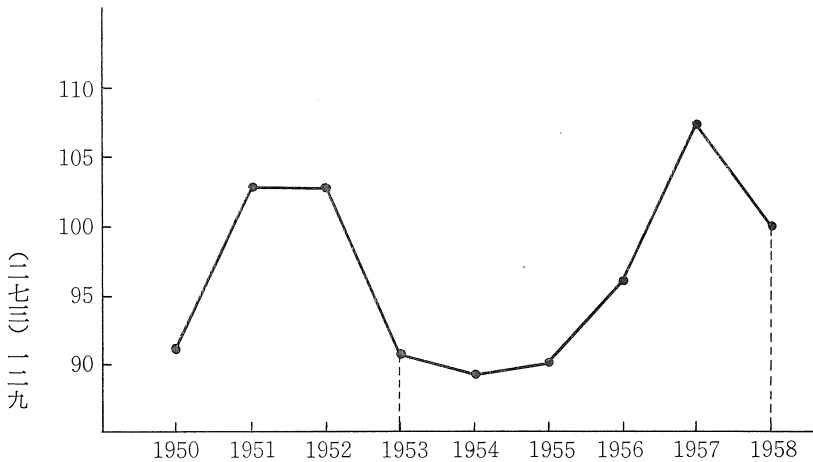
<第 2 表>

年度	(1) キューバの 国民総生産 (単位100万ペソ)	(2) キューバの 人口 (単位1000人)	キューバの1人 当り国民総生産 (1) (2) (単位ペソ)	1958年を 100 とする指数
1950	2028	5508	368	91
1951	2347	5621	418	103
1952	2391	5725	418	103
1953	2163	5876	368	91
1954	2158	6000	360	89
1955	2227	6127	364	90
1956	2421	6256	387	96
1957	2778	6388	435	107
1958	2640	6523	405	100

(出所) (1) Naciones Unidas, BOLETIN ESTADISTICO DE AME—
RICA LATINA, Vol. 1, No. 1. Marzo/March 1964, p. 42.

(2) Ibid., p. 13.

<第 II 図>



(一七三) 二一九

キューバ革命の背景 (藤田)

おりである。これを図示すると△第Ⅱ図Vのようになる。この△第Ⅱ図Vによると、いわゆるJカーブが二回見られる。第一回目の落ち込みが見られる時——すなわち一九五三年であるが——、この年に事実、カストロの最初の革命運動が起こっている。そして、第二回目の落ち込みの時——すなわち一九五八年であるが——、この年に広範な反バチスタ過動が起こり、この年の末にバチスタ政権は崩壊し、キューバ革命運動が成功している。

このように、デーヴィスのいうJカーブが確かにキューバ革命のケースでも見い出され、Jカーブを描いた時に、革命が起こり、革命運動が成功している。もっとも、キューバには、デーヴィスのいうような「長期間の経済発展」が見られたわけではない。キューバ経済はずっと停滞していた。だが、その停滞の間にも、砂糖事情の好転により、経済状態がごく一時的に上向いたこともあった。しかし、その状態は長くは続かず、すぐ経済の落ち込みが見られる。この落ち込みの時に、キューバ国民は特に強い不満を感じたと思われる。それは、経済停滞を脱しつつあるという期待が裏切られたことに対する不満である。△第Ⅱ図Vを見ると、一九五一、一九五二年の兩年および一九五七年が、キューバ国民に経済停滞を脱しつつあるのではないかといった期待をもたせた時であったろう。しかし、それぞれの翌年の一九五三年、一九五八年には急激な落ち込みが見られ、その期待が完全に裏切られている。従って、この一九五三年および一九五八年の兩年には、キューバ国民の不満は特に強いものとなっていたと思われる。

再度述べるが、革命は、国民の不満に起因するものである。現実の経済状態がどうかということとは直接には関係がない。よって、キューバが他のラテン・アメリカ諸国に比べて経済状態が良かったからとて、革命の経済的条件

がなかったとはいえない。キューバ革命の背景として、以上見てきたごとく、明らかに経済的要因が考えられる。

- (1) Dudley Seers, "The Economic and Social Background", in Dudley Seers (ed.), *Cuba: The Economic and Social Revolution* (North Carolina: The University of North Carolina Press, 1964), p. 13.
- (2) L. ロバーマン、P. M. スウィージー著、池上幹徳訳『キューバ——一つの革命の解剖——』岩波書店、一九六五年、一二ページ。
- (3) Quoted in, Hugh Thomas, "The origins of the Cuban revolution," *The World Today*, October 1963, p. 453.
- (4) キューバの革命家ホセ・マルチ (José Martí) は、一八八三年、すでに単一作物経済への傾斜がもつ危険性を認識し、「人民は、単一の作物に生存の基礎をおくその日に、自殺する」と警告していた。(ヒューバーマン、スウィージー、前掲書、一七ページより引用)
- (5) 同前書、一〇——一ページ。
- (6) Leiden and Schmitt, p. 188.
- (7) Daniel James, *Cuba: The First Soviet Satellite in the Americas* (New York: The Hearst Corporation, 1961), pp. 24-25.
- (8) C. プリントン著、岡義武、篠原一訳『革命の解剖』岩波現代叢書、一九五二年、三一五ページ。
- (9) James C. Davies, "Toward a Theory of Revolution," *American Sociological Review*, February 1962, pp. 6-7.
- (10) Dudley Seers, pp. 17-18.
- (11) J. C. Davies, pp. 6-8.

三 政権の欠陥

歴史学者 A・M・シュレジンガーが述べるごとく、キューバ革命の背景にある直接の動機は、経済と同様政治にもあった。⁽¹⁾

一九〇二年、共和国として独立以来のキューバの歴史の大部分は、歴代政権の腐敗、無能、暴虐の歴史であった。多くの人々が、次々に進歩と革新を約束して政権の座についたが、常に腐敗、無能、暴虐のうちにその政権の座を去っていったのである。従って、共和国としての独立以来のキューバの歴史は、激しくかつ根深い政治的不満の歴史でもあったと言いうるだろう。⁽²⁾ この歴代政権の中でも、その度合において最もひどかったのは、一九二五年から一九三三年までその政権の座にあったマチャド政権と、一九五二年から一九五八年末までのバチスタ政権であった。⁽³⁾

ヘラルド・マチャド (Gerardo Machado) は、中産市民からは、多年の混乱を克服して秩序をもたらしてくれるものと期待され、一九二五年、清潔な政府と任期一期を約束して、大統領に就任した。彼は最初は、砂糖経済に全面的に頼ることの危険を認識し、産業の多様化と拡大を奨励して人気を博した。しかし、彼は、一九二七年頃より、キューバ政治にしばしば見られる独裁・専制性を強く表わしはじめた。彼は一九二七年から二八年にかけて、憲法を修正し、大統領の任期を六年に延長し、また副大統領制をも廃止した。そして大統領選挙には、かつての一期だけという公約を破って再び立候補し、反対派を弾圧して、無競争で当選した。このようなマチャドの独裁的な行為

に対して、労働運動の指導者、一部の政治家、知識人が反マチャド運動に立ちあがった。折しも、アメリカに始まった世界恐慌の嵐がキューバにも波及し、砂糖の生産は縮少し、失業者の数は増大し、都市や農村では、暴動、ストライキが頻発した。

このような反対運動に対して、マチャドは徹底した弾圧政策でもつてのぞんだ。マチャドは、言論の自由を抑え、彼に反対する何千人という人々を投獄もしくは追放した。パン・アメリカン労働総同盟の議長であったウィリアム・グリーン (William Green) は、「このマチャド政権について、「真のテロリズムが見られ、……およそ信じられないほどの極端な残虐、暗殺、虐待で満ちた政権である」と述べている。このようなマチャドの恐怖政治に対して、一九三三年八月にいたり、軍部までが支持をやめたため、彼は遂に失脚を余儀なくされた。代わって政権の座について、カルロス・マニユエル・セスベデス (Carlos Manuel Cespedes) であるが、彼は優柔不断な人物で、事態を何ら收拾することができず、依然混乱状態が続いた。

このキューバの混乱と無秩序の中より登場したのが、フルヘンシオ・バチスタ軍曹であった。バチスタは、一九三三年九月四日、下士官グループを率い、上級将校に対して反乱を起こし、軍部の実権を握った。反乱の後、彼は自ら大佐に昇進し、参謀総長となった。そして、やがて彼は、キューバ政治の実権を握るようになり、キューバ最大の実力者にのし上った。一九三四年から一九五八年の末までに、キューバの政権はしばしば変わるが、常に彼がキューバの政治を支配したのである。マクガフィー、バーネットが述べているように、この間 (一九三四年から一九五八年一二月三十一日まで) のキューバの歴史の大部分は、バチスタという一人物を中心⁽⁵⁾に展開したということが

できよう。

バチスタは、一九四〇年までは参謀総長として、政治の実権を握っていた。その間、彼は農村の教育計画、労働者の保護等によって、若干の人気を得ていた。また、キューバの政治に「秩序と安定」をもたらしたことによって、キューバの実業界も彼を評価していた。さらに、バチスタは、自分の地位を一層確固としたものにするため、一九三八年四月に、新しい憲法の制定会議を呼びかけ、当時にあつてはもつとも進歩的な憲法が制定された。そして、一九四〇年六月、この新憲法のもとで行なわれた最初の選挙で、彼は大統領に選ばれ、遂に政権の表舞台に登場してきた。このバチスタ政権の第一期目は、概して悪いものではなかった。彼は強力な大統領であつたが、決して専制・独裁者ではなかつた。その四年の施政期間中、社会福祉、経済面において努力し、一九四四年には、憲法の規定に従つて、マチャドのように大統領選挙に再出馬しなかつた。

次いで一九四四年、大統領になつたのが、キューバ革命真正党⁽⁶⁾ (Partido Revolucionario Cubano Auténtico) のグラウ・サン・マルチン (Grau San Martín) であり、さらに一九四八年にはグラウに代わつて同党のプリオ・ソカラス (Prió Socarrás) が大統領になつた。キューバ国民は、この両真正党政権の改革に期待をかけたが、実際に政権を担当するや両真正党政権は、殆ど約束を実現できないばかりか、むしろ歴代の政権とは何ら変わることにない腐敗、汚職、無能の政權と化してしまつた。この間、国内の改革は依然放置されたままであつた。

このグラウ・プリオ両政権下の八年間、バチスタは、依然キューバにおける実力者の地位を保持してゐた。一九四八年には、彼は欠席投票で上院議員に選出され、またキューバの軍首脳部もすべて彼に忠誠であつた。一九五二

年に、バチスタは再び政治の表舞台に出ることを望み、大統領選挙に立候補することを決めた。一九五二年六月一日に行なわれる予定のキューバ大統領選挙には、バチスタの他にカルロス・エビア (Carlos Hevia) ロベルト・アグラモンテ (Roberto Agramonte) の二人が立候補していた。一九五二年三月一日の世論調査では、これらの他の候補者に比べ、バチスタが大統領選挙に勝つ見込が一番薄かった。そこで彼は、一九五二年三月一日、軍部とともに慎重に準備した計画のもとでクーデターを行ない、政権を奪取した。このバチスタのクーデターに対し、大学生のストライキ、各政党の指導者による抗議が行なわれたが、バチスタはそれらすべてを無視し、クーデターの直後、一九四〇年憲法を停止し、すべての行政権、立法権を自分の手に集中する新しい臨時法令を發布した。そして、彼は議会を解散し、すべての政党を解体し、独裁者となった。

バチスタに対する最初の反乱は、フィデル・カストロによって指導された。カストロは、バチスタのクーデターから数週間後、ハバナの緊急法廷にあらわれ、違法な政権奪取を行なったバチスタを処罰するよう要求したが、裁判所は受けつけなかった。そこで、カストロは一年余りの準備の後、一九五三年七月二六日、わずか二〇〇人たらずを率いて、オリエンテ州サンチャゴ・デ・キューバの郊外にあるキューバで二番目に大きいモンカダ兵営を襲撃した。この武装蜂起は失敗したが、国民の注目をかちとり、フィデル・カストロと七月二六日運動が知られるようになり、オリエンテではバチスタ独裁に対する抵抗の精神がよびおこされた。これが、カストロによるキューバ革命の始まりであった。

このカストロによる反乱の後、バチスタは彼に対する反対を封じるため、警察によるテロを強化し、また新聞を

規制し、市民の自由を抑圧した。しかし、一九五七年頃までは、まだマチャド政権ほどではなかった。バチスタは、一九五四年に名目上の選挙を行なって、彼の立場を合法化しようとした。この選挙に諸政党は参加することをやめたが、グラウ・サン・マルチンは対立候補として再び立った。しかし、彼はバチスタの管理によって選挙が公正に行なわれないと見て、立候補をやめた。一九五五年二月、バチスタは名目上の選挙で選ばれた大統領として就任した。バチスタは選挙を行なうことよって、国民を納得させようとしたのであるが、反対派はこの選挙を認めず、反対勢力が依然治まらないのを見て、再び弾圧政策に転じた。バチスタ政権の最後の三年間は、マチャド政権時代に劣らないものであった。

キューバの反バチスタ闘争は、一九五六年以降、次第に盛り上がっていった。都市では、反バチスタ運動は学生および知識人を中心に結成された。彼らは、デモ、ストライキ、兵営攻撃等を散発的に行なった。一方、一九五六年一二月には、メキシコでバチスタ打倒闘争の準備をしていたフィデル・カストロに率いられた一団がキューバに上陸し、オリエンテ州シエラ・マエス山中より、ゲリラ闘争を開始した。

このような反対運動に対して、バチスタは徹底した弾圧政策でもって臨んだ。抵抗を粉碎するため、言語に絶するテロや暴力手段がとられた。ヒューバーマンとスウィーシーは、「バチスタの軍隊と警察は、捕虜にした反乱軍兵士や逮捕した地下活動の労働者をとりあつかうのに、ヒトラーがやったとおりにした。笞打と拷問は、アルジェリアでフランス人がやっているのと同じように、物凄なものだった」と述べている。この警察と軍隊による暴力とテロは、次第に無実の市民にまでおよぶにいたり、国民は完全にバチスタより離反することになった。バチスタが打

倒されるまでに、全部で約二万人のキューバ国民が、バチスタの犠牲になったといわれている。⁽⁸⁾

このような暴虐性に加えて、バチスタ政権の特徴として、その「腐敗と汚職」があげられる。一般に、ラテン・アメリカ政治に関して、その「暴虐性」とならんで「腐敗」というイメージがいだかれている。⁽⁹⁾このラテン・アメリカ政治の「腐敗」は、実際に考えられているほどひどいものではないが、しかし存在することも事実である。革命前のキューバは、この点ではラテン・アメリカ諸国の中でも典型的な国家であった。⁽¹⁰⁾特に、バチスタ政権の腐敗と汚職はよく知られている。汚職の正確な数字は分からないが、バチスタ自身が盗んだ金だけでも四億ドルにのぼったと推定されている。あるキューバ人の有力者は、その腐敗状況について、スウィージーらに、「いたるところ腐敗という有様になって、誠実な人まで、腐敗に関係していると自慢するものが少なくなかった。その人たちも、馬鹿よばわりされるよりは、不徳漢といわれる方がよかったのだ」と語ったといわれる。⁽¹¹⁾

キューバの歴代政権と同様、バチスタ政権もまた無能であった。たしかに、バチスタ政権は、かなりの規模の経済復興政策を掲げはしたが、相変わらず不徹底に終り、国民の期待を裏切り、ほとんど見るべき成果をあげえなかった。そして、キューバの山積する社会問題も、この政権は何ら解決しえなかった。この政権は、特に上層階級とアメリカ権益の擁護に専心し、一般国民の広範な、教育、衛生、住宅、あるいは経済上の機会に対する諸要求には概して無関心であった。

このようなバチスタ政権の暴虐、腐敗、無能、そして政権の強奪、さらにその外国偏向といったこと——これらが、直接キューバ革命への道を開いたのである。従って、キューバ革命の背景にあった第三の要因として、政権の

欠陥、特にパチスタ政権の欠陥があげられよう。⁽²⁷⁾

- (1) Arthur M. Schlesinger, Jr., *A Thousand Days: John F. Kennedy in the White House* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1965), p. 216.
- (2) *Ibid.*
- (3) ブランクステンは、他のどのラテン・アメリカ諸国よりも、キューバはスペインの独裁・専制主義の政治的伝統を強く受けつづる」と述べている (Blanksten, p. 116)。
- (4) Quoted in, M. Zeitlin and R. Scheer, *Cuba: Tragedy in Our Hemisphere* (New York: Grove Press, 1963), p. 41.
- (5) W. MacGaffey and C. R. Barnett, *Cuba: Its People, Its Society, Its Culture* (New Haven: HRAF Press, 1962), p. 23.
- (6) これは通称アウテンティコ (Auténtico) と呼ばれ、一九三四年、グラウ・サン・マルチンらのキューバの民族主義的な知識人を中心にして、結成された政党である。この政党は、ペルーのアブラ党やメネズエラの民主行動党、ボリビアの国民革命運動といったラテン・アメリカにおける土着の改革政党の系譜に属するものである。そして、政治的民主主義、親労働政策、社会福祉、農業改革、工業化、公衆衛生および教育施設の拡充、公共福祉のための政府による経済の規制等をその政治綱領としていた。
- (7) ヒューバーマン、スウィージー、前掲書、一〇三ページ。
- (8) 同前書、四六ページ。
- (9) R. A. Gomez, *Government and Politics in Latin America* (rev. ed.) (New York: Random House, 1965), p. 67.
- (10) Blanksten, p. 124.
- (11) ヒューバーマン、スウィージー、前掲書、一〇四ページ。
- (12) T・ドレーパー (Theodore Draper) は、「カストロの権力獲得への道を開いたのは、フルヘンシオ・パチスタであった。

……パチスタが、キューバ革命の不可欠の要素であった」と述べている (Quoted in, Herbert L. Matthews, *Castro: A Political Biography*, Pelican Books, 1970, p. 55)。

む す び

以上見てきたごとく、背景にあってキューバ革命を生起させた主たる要因として、(一)外国支配、(二)経済の停滞、(三)政権の欠陥の三つが指摘できる。

しかし、これらは、他の多くのラテン、アメリカ諸国にも現実に見られる現象である。にもかかわらず、何故、他のラテン・アメリカ諸国ではなく、キューバに「真の革命」が起きたのだろうか。この問題を、本稿を終わるにあたり考えてみたい。

この疑問に対する答えの一部は、すでに述べたところである。すなわち、「外国支配」については、キューバには他のラテン・アメリカ諸国には見られない「プラタティズム」(Platism)が存在し、一九三四年のプラタト修正廃棄以後も、このプラタト修正は、キューバ国民の心に残存し、依然アメリカによって経済的のみならず政治的にも強く支配されているとのキューバ国民の感情は消えなかった。また「経済の停滞」では、キューバは他のどのラテン・アメリカ諸国よりも、その停滞期間が長かった。そして、「政権の欠陥」の点では、他のラテン・アメリカ諸国にも同様な専制・独裁政権が見られるが、一九五七年以降のパチスタ政権ほど暴虐、腐敗の政権はなかった。要するに、キューバは、他の多くのラテン・アメリカ諸国とは「外国支配」、「経済の停滞」、「政権の欠陥」のすべてに

おいて、その強度の点で違っていたのである。

さらに、このような背景要因の差異に加えて、もう一つ、「革命の指導者」の差異が指摘できよう。元来、革命は、それを生起させるに充分な背景要因があっても、必ずしも自然に生じるものではない。革命の生起には、このような背景要因プラス「加速者」(accelerator)あるいは「引き金」(trigger)ともいうべき「革命の指導者」が必要なのである。その点、キューバには他のラテン・アメリカ諸国には見られない、フィデル・カストロという有能な革命指導者がいた。ハーバート・L・マッシュューズが、「キューバ革命はフィデル・カストロの革命である」と述べるが、これは決して誇張とは言えないであろう。カストロはキューバ革命の不可欠の要素であった。

ともあれ、キューバに「真の革命」が起きたのは、革命を生起させるに充分な背景要因が存在したことと、フィデル・カストロという有能な革命指導者がいたことによるものといえよう。

(1) Herbert L. Matthews, p. 13.